

日蓮大聖人御書全集

やどやのにゆうどう

さいごいじよう

宿屋入道への再御状

新版
853

宿屋入道への再御状

ぶんえい

ねん

文永5年('68)

がつ

9月

さい

47歳

やどやみつのり

宿屋光則

い ouchi-gatsu

goro

ku-satsu

mai

nochi

kon-getsu

ita

去ぬる八月の比に愚札を進らせしむるの後、今月に至る

ぜひ

hen-ppo

tama

u-ttunen-san

gata

so-jo-so-jo

yu-e

も是非につけて返報を給わらず、鬱念散じ難し。恩々の故に

so-jo-ppo

kei-iri-yaku

yu-e

itsugi-yo-jo

hon-mon

想亡せしむるか。軽略せらるるの故に、慳□一行か。本文

い しし

sho-jo-to

anado

dai-jo-jo

oso

to-jo-un-nun

に云わく「師子は少兎を蔑らず、大象を畏れず」等云々。

man

ichi

ta-ko-ku

hei

ku-ni

oso

sh-yu-ppu-tai

もしまた方が一、他国の兵、この国を襲う□出来せば、

し so-jo

to-ga

ki-hen

ka

知って奏せざるの失、ひとえに貴辺に懸かるべし。

bu-ppo

mana

ho-jo

shin-mi-yo-jo

su

ko-ko-on

ho-jo

仏法を学ぶの法は、身命を捨てて国恩に報ぜんがためな

まった じしん

り。全く自身のためにあらず。本文に云わく「雨を見て竜

ほんもん い

あめ

み

りゆう

し

はちす

み

いけ

し

とううんぬん

さいなんきゆう

み

ゆえ

を知り、蓮を見て池を知る」等云々。災難急を見るの故に、

たびたび

おどろ

もち

いさ

きよう

度々これを驚かす。用いざるに、しかもこれを諫む。強。